

図9

道德共同体の3つの構成要素



理想的な共同体には自助、共助、公助が欠かせませんが、特に「共助」は最も身近な道德実践です

ルズ（イギリスの著述家）の「天は自ら助くるものを助く」という言葉の通り、「自助」なくして周囲からの援助を期待するのは、真の幸福や生きがいを得ることはできません。

このように、「自助」に励む自立した個人と、そのような個人を法律や制度の面からサポートする「公助」の相補的な関係が、理想的な個人と社会の関係です。一方で「道德的な共同体」をつくるに当たり、現代において見直しが求められるもう一つの視点が「共助」です。

高度な経済発展を遂げた日本では、プライバシーの守られた個人の時間や空間を確保しやすくなった反面、「人間は誰しも一人では生きられない」ことを実感しにくくなりました。自立や自助は重要ですが、ともすると「独りで生きていける」「誰にも迷惑をかけていない」という誤解を招き、近隣社会への配慮が希薄となる場合も少なくありません。

家庭や近隣社会は、最も身近な道德実践の場です。自立した生活を営むとともに、しっかりと「共助」の感覚を保ちたいものです。

今月の範囲

第一部 基礎編
第三章 道德共同体をつくる
一、個人と社会

モラロジー研究所の概論講座で使用される改訂『テキスト モラロジー概論』について、今月は「道德共同体」をつくる上で土台となる自助・共助・公助について図解します。



モラロジーを楽しく、平易に学びたい——。そんな要望にお応えして、この連載では改訂『テキスト モラロジー概論』の内容を図で解説します。ご自身の学習に、あるいは勉強会の資料としてご活用ください。

構成=「れいろう」編集部

個人と社会の関わり

——自助・共助・公助の視点から

もちづきふみあき
柏生涯学習センター研修企画担当 望月文明

自分の働きや能力に応じて報酬を得る社会と、労力や能力の個人差を問わずに誰もが均等に報酬を得る社会、皆さんならどちらを選びますか。

どちらの社会にも長所がありますが、極端に偏れば問題が生じます。徹底的な自由競争の社会では、貧富の格差が助長されますし、極端な平等主義の社会では、勤労意欲が抑制されかねません。

多くの先進国は、これらの中間に位置し、定められたルール内での自由な選択と、必要な場合には最低限の生活が保障されています。もちろん、各国には多数の問題もありますが、それらを解決すべく法律や制度は改正され、整えられています。このような国や地方自治体による支援が「公助」にあたります。

しかし、国家の法律や制度が充実しただけでは個人が幸せに暮らせるとは限りません。毎日の生活に生きがいを感じるには、一人ひとりの自助努力や労働が不可欠です。もちろん、諸事情により働くことのできない人の生活を守るためには、生活保護の制度も必要です。

また、基本的にはサミュエル・スマイ